

組織図の説明

2007年に作成した「世界と国内の組織図」についてご説明致します。

中央、横に引かれた点線の上は、世界、そしてその下が、日本国内の組織であります。中央から左側がプロの組織、右側はアマチュアの組織です。

[1] 初期の国際的なダンス界は…

ICBD (International Council of Ballroom Dancing)

プロの組織 (各国の教師協会の集まり) プロの世界選手権等を開催。

ICAD (International Council of Amateur Dancers)

ICBD より後に設立され、アマチュアの世界選手権等を開催。

以上、国際組織は二つに分かれていて、表面上は平穏でありました。

国内では、NATD (日本社交舞踏教師協会) が両方に加盟していました。

NLCBD (日本舞踏競技連盟) が結成され、プロ・アマの競技会を開催。

JADA (アマチュアダンス協会) が設立されたために、ICBD の加盟権を友好的に移譲いたしました。

国際・国内とも、プロ・アマの関係は良好でしたが、どちらかと言えば、プロが主体的な立場でありました。

[2] プロ・アマの対立

力をつけてきた ICAD は名前を IDSF (International DanceSports Federation) と変更、アマチュアの名前を外した事により、ICBD (プロ側) も、WD/DSC、WDC と後に名称を変更することとなります。

国内では、裏面工作により、NATD が保持してきた ICBD の加盟権を JDC が取ることになり、連盟はトップの3組に限り JDC 主催の競技会に出場することを認め、世界選手権に選手を送ることが出来る事となったのです。

(当時は他に国際的な組織はなかった)

ご存じの如く、連盟は JDC とそこから分裂した JCF と三者で JNCPD を結成、連盟は保持している「全日本選手権」のタイトルを、JDC は ICBD の加盟権を提供して「統一全日本選手権」を開催、その上位二組を世界選手権大会の日本代表選手とすることに合意したのです。

LACD は社会人と学連とで JADA(後の JDSF)を組織、IDSF に加盟、名前も JDSF と改称されます。

[3] オリンピックへの道

IDSF がアマチュアの名前を外し、力を付けオリンピックへの道筋である IOC の IF (International Federation) の加盟権を持つにあたり、決定的に

対立の構図が出来上がります。

国際オリンピック委員会は、世界で最高の技術を持つ選手が出場できる組織作りを求めた為に WDC (プロ) に働きかけましたが、交渉は決裂し、WDC が IDSF の選手を WDC 関係の競技会から追放した為に法廷闘争となり、訴訟は二回とも WDC が敗訴となり (ヨーロッパ内の別の 2 カ国で) 多額の賠償金が支払われることになったそうです (未だ全額を支払っていないとも聞いています)。その後 WDC は IDSF に対抗する為に、傘下に IDU というアマチュア (反 IDSF の集合体) を抱え、対抗の姿勢を強めている情勢です。

国内でも当然の如く、JOC の加盟権を IDSF の傘下である JDSF が持つてしまう事となるのであります。

[4] 国内のプロ・アマの関係

連盟に対抗する勢力 (プロ・アマ) が結集して DSCJ を結成されます。

(図の最下段参照)

JDC は将来、閉ざされるであろうオリンピックへの道を DSCJ→JDSF→IDSF を通して担保 (?) すべく、JDC は行動を選択する事になります。(連盟はこの方式が成立すれば、将来のオリンピックへの参加の道が閉ざされる事になります。

[5] 国際的なプロ・アマの組織の模索 (IPDSC の誕生)

WDC の運営に飽き足らなくなったプロ集団が、新しい組織の「IPDSC」を設立致しました。

その目的は、IDSF と協調して、車椅子ダンス、ロックンロール、民族舞踊などと共に「WDSF」を設立、そこに IOC の加盟権を移すことを確認する協定を持ったのです。

[6] 考えられる「最悪」の状態

JCF から分裂した JPBDA は、(JDC, JCF, JBDF の三団体による JNCPD から弾き出された為) 生き残りを賭けて IPDSC に加盟申請をしたのです。

IPDSC は、日本の最大プロ組織である連盟の動向を見極めるため、昨年末 (2006 年) JBDF にその回答を求めてきたのですが、内部の意見が纏まらず、次の理事会・評議員会である 6 月まで決まらなかった為に、JPDSA を準会員としていました。

当然、6 月までに連盟の意向が決らない時は、正会員になったことでありましょう。

IPDSC の規定により、一カ国一会員となっている事から、JPDSA が正会員に認定されれば、現在の「WDC」同様、連盟が「国際的な組織」の正会員になれる道は閉ざされた事となります。

オリンピックにダンスが採用されたとしても、連盟から選手を派遣出来なく

なるのです。

しかるに、JDC は利口にも（ずるくとも…と云った方がよいかも）その道筋はつけているのです。（連盟が如何に「お人好しであるか！」）

その時点では、日本体育連盟の加盟も JDSF に持っていかれ、連盟は現在の JNCPD 同様、JPBDA の下で同様な立場にならざるを得なくなることは自明の理であります。

[7] 現在の状態（2007年6月当時の）

当分の間、連盟は両方に参加しておくのが最も良い、と思われました。

JNCPD 設立時の協定書にある如く、連盟を拘束すること（追い出す）は出来ません。WDC に選手や審査員の登録及び年会費も支払い済みであります。

即ち、両方の世界選手権に代表選手を派遣すれば良いのが最も妥当な選択肢でありました。

[8] 国内組織の整備

国際組織と同様、国内にプロ・アマの新しい組織を設立し、協調してダンスの普及・発展に向かって進むことこそ公益法人としての道でありましょう。

また、日本体育協会への加盟も開けてまいりましょう。 以上